

「に例示句」の表現性について

安 祥希

1. はじめに

本稿が分析の対象とするのは、並立助詞「に」が成す次のような表現である。

- (1) 「まあ、護摩の灰に雲助に、旅先に不逞の連中が多いからね。
能く有ることさ」
- (2) 年末年始は、帰省に旅行にクルマの移動が増える季節。
- (3) このおもちゃ箱感覚と、たやすく
コラボレーションできるアーティ
ストたちが、夜な夜なライブにパ
フォーマンスに、とにかくいつで
も賑わっているんです。

(安2016:136改)

(1)～(3)は、安(2016)が「に例示句」と呼ぶものであり、最後尾の名詞に並立助詞「に」が付加した名詞句(＝下線部)が、四角で囲まれた名詞句や、述部で表される事物(集合¹⁾)の要素を例示する表現である。安(2016)は、「に例示句」と不定格同格構造並立句タイプ(江口1998)、「に」と近いとされる並立助詞「と」との比較を通してその特徴を記述しているが、「に例示句」がどのように例示を表しているのか、詳述すれば、「に例示句」を構成する並立助詞「に」の意味やそこから派生する機能、同じ文の中にある他の要素との修飾関係などが組み合わさることと生じる「に例示句」全体の表現性(＝

例示解釈)がどのようなファクターに支えられているのか、については明らかにされていない。

そこで本稿では、「に例示句」について、安(2016)が取り上げた現象の再検討と新たな現象の分析を行い、「に例示句」が例示を表す他の表現とは異なるメカニズムで例示を表していることを示す。

2. 先行研究の概観

安(2016)は並立助詞「に」の用法を3つに分類し²⁾、その一つに(1)～(3)のような「に例示句」を位置付けている。

「に例示句」に関する安(2016)の主な主張は以下の2点である。

- ①「に例示句」は不定格同格構造並立句タイプと類似するが、後者が2つの名詞句が同じ格を受けて「要素－集合」の関係を作るのに対し、前者は語用論的にそれを作る。
- ②「に例示句」は副詞と同様の位置に生起している。

江口(1998)によれば、不定格同格構造並立句タイプは、並立助詞で並べられた句が後続する名詞句の同格句になるものであり、「(1) 前の句と後ろの句が結果的に「同じ」対象を指示し、(2) 前の句と後ろの句の順番を逆にすると非文になる(p.13)」という特徴を持つ³⁾。

- (4) それにイタリアとかドイツとか、

あんな野蛮な国と結んで、こんな
向う見ずな戦争をしなければ
ならないわけが何処にあるんだ
い？ (江口1998:13 改)

「に例示句」と不定格構造並立句タイプは、並立助詞が成す句ともう一つの名詞句が意味的に「要素-集合」の関係で解釈されるという共通点を持つ。しかし、安(2016:138)は、「に例示句」は(1)を満たすが、(2)は満たさないため、両者は異なるものであると主張する。

(5) *それに、あんな野蛮な国と、イタリアとかドイツとか、結んで、こんな向う見ずな戦争をしなければならぬわけが何処にあるんだい？

(6) 年末年始は、クルマの移動が、帰省に旅行に、増える季節。

(安2016:138)

また、不定格構造並立句タイプでは集合を表す名詞句を、格助詞を残して削除することができるが、「に例示句」ではできないという違いも存在するという。

(7) それに、イタリアとかドイツとかと結んで、こんな向う見ずな戦争をしなければならぬわけが何処にあるんだい？

(8) *年末年始は、帰省に旅行にが増える季節。

(安2016:138)

安(2016:138-139)は、(7)(8)の対比は不定格構造並立句タイプが2つの名詞句が同じ格を受けて「要素-集合」の関係を作っているのに対し、「に例示句」はより文脈に依存した形でその関係を作っていることを意味しているとし、その根拠として(9)を挙げる⁴⁾。

(9) こうしてぼくは、自分のやりたい

ことがわかり、毎日、勉強にスポーツ
に頑張っているよ。

安(2016:139)

そして、(9)には「勉強にスポーツに」という要素に対して名詞句「自分のやりたいこと」が集合になる解釈と、文脈から推論される「自分のやりたいことのために今頑張っていること」が集合になる解釈とが存在するため、「に例示句」では「要素-集合」の関係が語用論的に決定されると捉える必要がある(=①)とする。

また、安(2016)は、「に例示句」が不定格構造並立句タイプのような同格構造を作っていないこと、(10)～(13)のように連体助詞や格助詞を伴えないことから、「に例示句」は副詞と同様の位置に生起していると捉えざるを得ない(p.140) (=②)としている。

(10) 研究支援に技術者教育に、サポータープログラムを提供する。

(11) *研究支援に技術者教育にのサポータープログラムを提供する。

(12) *研究支援に技術者教育にが提供された。

(13) *研究支援に技術者教育にを提供する。

(安2016:140)

3. 先行研究の問題点と本稿の課題

安(2016)は、「に例示句」という現象を見出し、その文法的特徴の一端を明らかにした点で評価に値する。しかし、その主張である①②には問題がある。

まず①について、安(2016)は「に例示句」における「要素-集合」の関係は語用論的に決定されるとするが、「に例示句」に(9)のような例はほぼ見られず、ほとんどが単一の解釈のものである。(9)の

ような特殊な例を一般化の中心に据えるのは問題があるため、単一の解釈のものを基本とし、(9)のような特殊な例をもカバーする説明を与えなくてはならない。

次に②について、「に例示句」が副詞と同様の位置に生起しているならば、そのかかり先は述語であるため、集合を表す名詞句を消去することが可能なはずである。しかし、実際は消去できない。

- (14)「まあ、護摩の灰に雲助に、旅先
にゃ {不逞の連中} が／*Ø} 多い
からね。能く有ることさ」

- (15) 年末年始は、帰省に旅行に {クル
マの移動} が／*Ø} 増える季節。

したがって、「に例示句」の生起位置については再考を要する。

以上の2点は、「に例示句」がどのような言語現象なのかを、より多角的な観点から分析し直す必要があることを示しているが、さらに根本的な問題として「に例示句」の表現性としての例示解釈を支えるメカニズムが明らかにされていないという点が指摘できる。

「に例示句」が例示を表すことと関与する可能性があるものとしては、以下のようなものが考えられる。

- A. 並立助詞「に」の性質
- B. 2つの名詞句間の構造
- C. 文中の他の要素との修飾関係

このうち、Bは安(2016)ですでに検討されているため、次節以降では、A、Cを中心に検討を行っていく。また、その過程で、本節で指摘した修正を要する2点についても代案を提示する。

4. 「に例示句」と不定的同格構造並立句タイプ

本節では、「に例示句」が例示を表すメカニズムに関与する可能性のある「A. 並立助詞「に」の性質」について検討していく。これについては、「に例示句」を成す「に」と同じ並立助詞が成す不定的同格構造並立句タイプとの比較が有効である。両者については、すでに安(2016)で比較・検討がなされているが、そこで取り上げられているのは「とか」(=(4)(5)(7))のみであり、また、比較の焦点も「要素-集合」と解釈される2つの名詞句間の構造のみである。

そこで、本節では、他の並立助詞が成す不定的同格構造並立句タイプも取り上げ、並立助詞としての性質という観点から再度検討を行っていく。

まず、「に例示句」および不定的同格構造並立句タイプの用例を以下に示す((18)~(20)は江口1998:13より引用)。

- (16)「まあ、護摩の灰に雲助に、旅先
にゃ {不逞の連中} が多いからね。
能く有ることさ」 (=(1))

- (17) それに、イタリアとかドイツと
か、あんな野蛮な国と結んで、…
(=(4))

- (18) …冴子や光俊や、派手なやつばかりがパーティーに来ていた。

- (19) 授業料やら書籍代やら、相当まと
まった金が父親から送られてあつたので、…

- (20) 単語なり公式なり、覚えていれば
すぐに役立ちそうなものに目を通
すべきだ。

先述の通り、「に例示句」と不定的同格

構造並立句タイプは、並立助詞が成す句ともう一つの名詞句が意味的に「要素-集合」の関係を表す点で共通点を持つのであったが、両者は同じメカニズムで例示を表しているのだろうか。

中俣(2015)は、並立助詞⁵⁾は「他の要素はない」という推移(「排他的推移」)の有無という語用論的な性質を有するとし⁶⁾、「とか」「や」「やら」「なり」を「排他的推移なし」に位置付けている。

(21) 私は昨日ビールとかワインを飲んだ。(中俣2015:106)

(22) 昨日は、ビールやワインを飲んだ。(中俣2015:64)

(23) 私は毎日、ビールやらワインを飲んでいる。(中俣2015:111)

(24) 大抵はフレーズなり文一文で書かれています。(中俣2015:125)

(21)~(24)ではいずれも「他にも何かある」という推論が生じる。これは「排他的推移あり」の並立助詞「に」や「と」と比較するとより明確になる。

(25) 昨日は、ビールにワインを飲んだ。(中俣2015:128)

(26) 昨日は、ビールとワインを飲んだ。(中俣2015:49)

ここで重要なのは、排他的推移の有無は、最後尾の名詞に並立助詞が付くか否かで変化することはないという点である。

(27) 同じ民族の住む地域に北とか南とかつけて呼ぶことは、…

(中俣2015:106改)

(28) やがておれはそいつが時には死んだばかりの時には生きたままの鳥や猫やネズミやをむさぼり食うのを眺めるのが無上の楽しみに

なった (「袋の中」p.143)

(29) この列車は名古屋やら大阪やらに止まる。(中俣2015:111)

(30) 困った時は先生なり友人なりに相談しなさい。(中俣2015:126)

(31) 私は昨日ビールとワインとを飲んだ。

しかし、「に」は、最後尾の名詞に付かない場合(= (25))は「排他的推移あり」であるのに対し、最後尾の名詞に付く(= 「に例示句」)と例示を表すようになる。

そもそも、「に」と同じ「排他的推移あり」の「と」は、「他の要素がある」という推移を生じさせないため、例示表現を成すことができない⁷⁾。

(32) *昨日は、ビールとワインと、色々な飲み物を飲んだ。

「排他的推移あり」の並立助詞が例示表現を作ることができないこと、排他的推移の有無が最後尾の名詞に並立助詞が付くか否かによって変化することはないこと、そして、安(2016)が指摘している「に例示句」は同格構造を成しているわけではないことの3点を考え合わせると、不定的同格構造並立句タイプは「2つの名詞句が同じ格を受けることで「要素-集合」の関係を作り、並立助詞「とか」「や」「やら」「なり」の「排他的推移なし」という語用論的な性質によって例示を表す」が、「に例示句」は「要素-集合」の関係の作り方も、例示の表し方も不定的同格構造並立句タイプのそれとは異なると考えることができる。

5. 「に例示句」とセットの「と」

前節において、「に例示句」が例示を表すメカニズムに「A. 並立助詞「に」の性

質」、特に「排他的推移」という語用論的な性質は関与していないと考えられることを見た。本節では、「セットの「と」」と呼ばれる表現との比較と通して、「C.文中の他の要素との修飾関係」について検討を行っていく。

藤田(1990,1998)は、次に示すような「と」を用いて名詞的項目を列記する表現を「項目列記の「と」」と呼んでいる。

(33) 信号は、青、黄、赤と変わる。

(34) キシメン、ミソカツ、守口漬と、
今日は大変なごちそうだ。

(35) 時代は江戸中期、十八世紀半ば、江戸時代の中では、国学、洋学、漢学とあらゆる学問が炎のごとく燃えさかった学芸復興期のさなかのことです。(藤田1998:186改)

このうち(33)は項目の順番を入れ替えると文の意味が変化するもの、(34)(35)は項目の順番を入れ替えても文の意味が変化しないものであり、藤田(1990,1998)は前者を「プロセスの「と」」、後者を「セットの「と」」と呼んでいる。

(36) *信号は、赤、黄、青と変わる。

(37) ミソカツ、守口漬、キシメンと、
今日は大変なごちそうだ。

(藤田1998:186)

「に例示句」はプロセス性を表すことはできないため、本節では、セットの「と」とのみ比較を行っていく。

藤田(1998:184-185)は、セットの「と」を含む項目列記の「と」はいずれも副詞的成分であり、「相関する述語・節で述べられている状態・状況を、それにかかわる項目を列記することで具体的に描き出す」とし、(35)について、「結果として

は、「～ト」が「あらゆる学問」の中味を示しているような形に見えるが、それは二次的な解釈可能性であって、まず、これらの「～ト」は述語・節にかかり、そのあり様を具体的に描き出して限定するという意味で、構文的にも意味的にも状態副詞的な修飾句として働いているものと考えられる」とする。

ここで一つ確認をしておかなければならないことがある。江口(1998)は、名詞句が成す不定的同格構造として、前節で扱った並立句タイプの他に、複数表現タイプ、列挙タイプを認めており、その例として(38)を挙げている。

(38) 半田ごて、ラジオペンチ、テスターと、必要な工具類は全部買いそろえた。(江口1998:14)

すでに見たように、不定的同格構造とセットの「と」では、「要素-集合」の関係の作り方が大きく異なる。そのため、(35)や(38)をどちらの表現として捉えるかが問題となるが、本稿ではこれらをセットの「と」と見る。なぜなら、(35)や(38)のような例は、不定的同格構造の特徴である格助詞を残して集合を表す名詞句を削除することができないからである((38)は「は」を「を」に変更した)⁸⁾。

(39) *国学、洋学、漢学とが炎のごとく燃えさかった学芸復興期のさなかのことです。

(40) *半田ごて、ラジオペンチ、テスターとを全部買いそろえた。

また、(35)は「あらゆる学問が炎のごとく燃えさかった」全体が、藤田(1998)の述べる節として「と句」を受けているため不可能であるが、(38)は「要素-集合」を入れ替えることも可能である。

(41) 必要な工具類を半田ごて、ラジオペンチ、テスターと全部買いそろえた。

このような現象はいずれもこのタイプの「と句」が副詞的成分であることを示していると捉えられるため、本稿では、これらを藤田(1998)が述べるセットの「と」であると考え。

以上を踏まえ、議論を元に戻す。

藤田(1998)が示した「副詞的修飾句による二次的な解釈可能性」という分析は、セットの「と」のように、集合を表す(四角で囲まれた)名詞句がある場合(= (35))とない場合(= (34))とがある現象を統一的に説明するのに有効である。

では、同じく集合を表す名詞句がある場合(= (1)(2))とない場合(= (3))のある「に例示句」はどうであろうか。

セットの「と」では、副詞的成分としての「と句」と集合を表す名詞句が別々に述語にかかっているため、名詞句を削除することが可能である。

(42) 半田ごて、ラジオペンチ、テスターと、全部買いそろえた。

一方、「に例示句」は、3節で確認したように、このような操作はできない。

(43)「まあ、護摩の灰に雲助に、旅先
にや {不逞の連中}が／*0} 多い
からね。能く有ることさ」

(再掲= (14))

(44) 年末年始は、帰省に旅行に {クルマの移動}が／*0} 増える季節。

(再掲= (15))

よって、「に例示句」をセットの「と」と同じ副詞的成分と捉えることはできない。

では、どのように捉えるべきか。本稿では、「に例示句」は「挿入句」とであると考

える。ここでいう挿入句とは、「文中の語句で表される特定の事物を補足・注釈するために挟み込まれる句」を指し、「に例示句」の場合は、「名詞句や述部で表される集合の要素を補足的・注釈的に示すことで当該の集合に対する詳しい説明を行う」ために挿入されると考えられる。

このように捉えると「に例示句」の振る舞いは次のように説明される。

「に例示句」は挿入句として「文中の語句で表される特定の事物を補足・注釈する」ため、名詞句が指示するモノを補足・注釈することもあれば、述語が表すコトを補足・注釈することもある。この点で名詞句と直接的に関係を持つことのできない副詞的成分とは異なる。また、補足・注釈される名詞句等に対しては従属的な関係にあるため、(45)(46)に示すように挿入句の削除は問題なく行うことができるが、挿入句によって補足・注釈される名詞句を削除して挿入句だけを残すことはできない((43)(44)を参照)。

(45)「まあ、{護摩の灰に雲助に／0}、
旅先にや {不逞の連中}が多いからね。能く有ることさ」

(46) 年末年始は、{帰省に旅行に／0}
{クルマの移動}が増える季節。

また、挿入句は補足・注釈される名詞句から離れすぎなければ許容されるため、両者を入れ替えることも可能である((6)を参照)。

加えて、「に例示句」は、表記する際に読点で挟んだり、読み上げる際に前後にポーズを入れたりすることが多いが、このことも「に例示句」が挿入句であることに付随して生じる現象であると考えることができる⁹⁾。

さらに、「に例示句」を挿入句と捉えることで、安 (2016) が挙げる (9) のような2つの解釈を有する例については、わかり先が2つ存在するような例が稀に存在すると捉えることが可能となり、安 (2016) のように「に例示句」において「要素-集合」の関係は語用論的に決定され则认为する必要はなくなる。

ここまでの議論を表1にまとめる。

表1 「要素-集合」の関係成立の原理

に例示句	挿入句として名詞句や述部と「要素-集合」の関係を作る
不定格同格構造	2つの名詞句が同じ格を受けることで「要素-集合」の関係を作る
セットの「と」	副詞的成分として述語にかかることで名詞句や述部と「要素-集合」の関係を作る（名詞句の場合は二次的に作る）

ただし、表1の内容は「に例示句」とはどのような言語現象なのか」に対する説明であり、「に例示句」がどのようなメカニズムで例示を表すのか」に対する説明ではない。

そこで次節では、「A. 並立助詞「に」の性質」に立ち返り、4節で見た語用論的性質とは別の観点から考察を行っていく。

6. 並立助詞「に」の意味的性質と例示

セットの「と」は、(38)にある「全部」のような要素がない限り、列挙なのか例示なのかは定まらないが、セットの「と」の中に「に例示句」が入ると解釈は例示に固定される。

(47) a. 半田ごて、ラジオペンチ、テスターと、必要な工具類を

買いそろえた。

b. 半田ごてにラジオペンチにテスターにと、必要な工具類を買いそろえた。

この現象は、「に例示句」の表現性としての例示解釈には「要素-集合」の関係を作る「C. 文中の他の要素との修飾関係」のみならず、その構成要素である「A. 並立助詞「に」の性質」が重要な役割を果たしていることを示している。

先に結論を述べるなら、本稿は「に例示句」が例示を表すのは、並立助詞「に」の《密着》(国広1967) という意味的性質によると考える。

4節で述べたように、例示を表すにしても非例示を表すにしても、「に」以外の並立助詞は、最後尾の名詞に並立助詞が付くか否かで解釈が変化することはない。

表2 例示解釈の原理

	最後尾有	最後尾無	例示を表す原理
に	例示	非例示	意味的性質 (《密着》)
と	非例示	非例示	—
とか	例示	例示	語用論的性質 (排他的推移なし)
や	例示	例示	
やら	例示	例示	
なり	例示	例示	

本稿は、この事実を、「に」だけが他の並立助詞にはない特別な意味的性質を持つことを示唆するものとして解釈する。

国広 (1967:36-37) は、「カーディガンにスラックスの女」という例について、「2つの衣裳が1つの緊密な組合せをなしている」としたうえで、「試みに「に」の代わりに「と」を入れてみると、一人の女の

服装という統一性がひどく弱められ、話者の注意力がカーディガンとスラックスに別々に払われている印象を与える」と述べ、このような解釈の違いは、「と」が《同じ資格の共同者を示す》だけであるのに対し、「に」は《密着の対象を示す》ために生じるとする。そして、両者の違いを次のように示している。

(48) a. 「と」: A ← B

b. 「に」: A ← B

国広 (1967:37)

国広 (1967) が「と」が表すとする《同じ資格の共同者》についてであるが、これは「と」だけでなく、「に」を含むすべての並立助詞が持つ性質だと考えられる。この点は、すべての並立助詞が並べられた名詞の順番の入れ替えを許容することからも明らかである (用例は「に」「と」「とか」で代表させるが、他も同様)。

(49) 「まあ、護摩の灰に雲助に／雲助に護摩の灰に」、旅先じゃ不逞の連中が多いからね。能く有ることさ」

(50) 私は昨日 {ビールとワインと／ワインとビールと} を飲んだ。

(51) 同じ民族の住む地域に {北とか南とか／南とか北とか} つけて呼ぶことは、…

ここから、「と」は《同じ資格の共同者を示す》以外の特徴を持たない最も典型的な並立助詞であるのに対し、「とか」「や」「やら」「なり」はそれに加えて「排他的推移なし」という語用論的性質を、「に」は《密着》という意味的性質を持つ並立助詞であると特徴付けることができる。そして、その「に」の性質が観察可能な形で現れるのが「に例示句」である。つまり、

「に例示句」は、他の並立助詞と異なり、その意味的性質である《密着》から派生する「要素Bを要求する」(= (48b)) という機能を有するため、(52) に示すようなブランク ([]) を持つ表現を作っており、そのブランクが「明示されている要素以外にもある」という含意を生じさせ、その結果、例示として解釈されるのである¹⁰⁾。

(52) 「まあ、護摩の灰に雲助に []、旅先じゃ不逞の連中が多いからね。能く有ることさ」

また、このように考えることで、表2が示す他の事実についても、最後尾の名詞に「に」が付かない場合に例示を表すことができないのは、例示解釈を生むブランクが埋まっているためであり、他の並立助詞がブランクを持たないのは《密着》という意味的性質を持たないためと捉えることが可能となる。

7. まとめと今後の課題

以上、本稿では、並べられた最後尾の名詞にも並立助詞「に」が付加し、文中に共起した名詞句や述部で表される集合の要素を例示する「に例示句」の表現性を支えるメカニズムについて考察を行い、以下の2点を主張した。

- ・「に例示句」は挿入句 (文中の語句で表される特定の事物を補足・注釈するために挟み込まれる句) として文中に生起することで、共起名詞句と述部という品詞的・文法的に異なる成分と「要素-集合」の関係を作る。
- ・「に例示句」の表現性としての例示解釈は、並立助詞「に」の持つ《密着》という意味的性質とそこから派生す

る「要素Bを要求する」という機能、並びに、「挿入句として名詞句や述語と「要素-集合」の関係を作る」という他の要素との修飾関係によって生じる。

本稿の分析で「に例示句」の記述を精緻化することができたように思うが、課題も残されている。

本稿では、「に例示句」を成す「に」は並立助詞であるという前提に立って議論を行ってきた。しかし、議論の中で取り上げることはできなかったが、次のような用例も確認される。

(56) 鴨・牡蠣・地鶏に、季節の素材
をあつめました

(「塚田農場」2018年冬限定メニュー)

「と」は、すべての名詞についた場合は並立助詞と解釈される(= (57a))が、最後尾の名詞だけについた場合はセットの「と」として解釈される(= (57b))。

(57) a. 鴨と牡蠣と地鶏とをあつめました

b. 鴨・牡蠣・地鶏と、季節の素材
材をあつめました

(56) (57) は、最後尾の名詞に付く「に」が並立助詞とは異なる性質を有するものという可能性があることを示すものとして捉えることができるが、これに関する検討は今後の課題としたい。

注

- 1) 安(2016)では「母集合」と呼ばれているが、本稿では、他の表現との比較の便宜上、「集合」に統一する。
- 2) 安(2016)は「名詞の入れ替えが可能か」「全体で1つの名詞として機能するか」という観点から、並立助詞「に」を

「格助詞の性質を残すもの」「典型的並立助詞」「例示を表す並立助詞」の3つに分類している。

3) 集合を表す名詞句について、不定格構造は江口(1998)に倣い、格助詞までを太字で記すが、「に例示句」は安(2016)に倣い、格助詞を含まない形で示す。

4) 安(2016)は、「勉強に頑張る」のように単項にすると許容度がやや落ちる(ネイティブ4名に確認)ことを根拠に(9)を並立助詞と捉えている。本稿でもこれに従い、(9)を「に例示句」として扱う。

5) 中俣(2015)では「並列助詞」という用語が使われている。

6) 中俣(2015)は、「排他的推移」は後続文脈でキャンセルすることが可能であるため、語用レベルの概念と捉えるべきであるとする。

(i) 昨日は佐藤と田中が手伝ってくれた。他にも、山本も手伝ってくれた。

(ii) 昨日は佐藤や田中が手伝ってくれた。来てくれたのはその2人だけだけど。(中俣2015:32)

7) 並立助詞「と」が例示を表すことができないことは安(2016:140)でも指摘されている(判定は安2016による)。

(iii) a. 研究支援に技術者教育に、サ
ポートプログラムを提供する。

b. ??研究支援と技術者教育と、サ
ポートプログラムを提供する。

8) 並立助詞「と」を用いた以下の例であれば許容されるが、これはセットの「と」とは異なる表現である。

(iv) 国学と洋学と漢学とが炎のごとく

燃えさかった学芸復興期のさなかのことです。

- (v) 半田ごととラジオペンチとテストターとを全部買いそろえた。

9) 挿入句による説明は「に例示句」のためだけのad hocなものではない。藤田(2018)は慣用句が挿入句的に用いられ、「以下に述べられている事柄の理由・状況説明を示す(p.49)」ことがあることを指摘している。

- (vi) いろいろ気になることもあろうが、案ずるより生むが易し、まずは検査を受けて見なさい

(藤田2018:49)

(vi) も、「に例示句」と同様に、慣用句を削除したり、「いろいろ気になることもあろうがまずは検査を受けて見なさい、案ずるより生むが易し」のように後置したりすることが可能である。また、読点で挟んだり、ポーズが入ったりすることが多いという点も共通する。

- 10) 「に」の語用論的性質である「排他的推移あり」は、注6で述べたように、後続文脈でキャンセル可能な推論である。したがって、「に例示句」の場合は、「に」の意味的性質である《密着》から派生する「要素Bを要求する」という機能が作用することで語用論的性質である「排他的推移あり」がキャンセルされると考えられる。

参考文献

- 安祥希(2016)「現代日本語における並立助詞「に」の3用法」『日本語文法』16-2, pp.128-143 日本語文法学会
江口正(1998)「日本語の間接疑問節の文

法的位置付けについて—不定的同格要素として—」『九大言語学研究室報告』19, pp.5-24 九州大学言語学研究室

国広哲弥(1967)「*And*」と「と・に・や・も」—日英両語語彙の比較—」『言語研究』50, pp.34-49 日本言語学会
中俣尚己(2015)『日本語並列表現の体系』ひつじ書房

藤田保幸(1990)「項目列記の「～ト」表現について」『詞林』8, pp.60-74 大阪大学古代中世文学研究会

藤田保幸(1998)「項目列記の「～ト」表現の本質」『滋賀大学教育学部紀要Ⅱ 人文科学・社会科学』48, pp.186-173 滋賀大学

藤田保幸(2018)「「名詞慣用句」について」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』27, pp.37-55 龍谷大学グローバル教育推進センター

用例出典

「塚田農場」2018年冬限定メニュー
(<https://r.gnavi.co.jp/g753331/menu2/>)、最終確認日：2018年12月23日

「袋の中」、諸星大二郎、『不安の立像』、創美社、1993年

(筑波大学非常勤講師)